雨、ときどき雪

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨、ときどき雪

【Ｎコード】
Ｎ０４７３Ｇ

【作者名】
青柳朔

【あらすじ】
雨の日には必ず、彼女はそこにいた。睨みつけるように降る雨を見つめて、何十分も背筋を伸ばして立っていた。いつの間にか目が離せなくなっていた。彼女はいったい、何を待っているんだろう――？

彼女を見つけたのは、雨が続く秋の日だった。

止まない雨にうんざりしながら、何気なく窓の向こうを眺める。空ばかりを見上げていたから最初は気づかなかった。

もう下校ラッシュは通り過ぎた。居残り組は委員会やら部活がある奴らだけだ。

だからだろう、昇降口に一人立つその女子生徒の存在に気がついたのは。

彼女は雨を睨みつけるように見つめていた。黒くて長い髪が二階の窓からでも湿っているのが分かる。どれくらいそこにいたのだろう、と最初はそう思った。

傘でも忘れたのだろうか。今朝は雨が降っていなかったから持っていなくても頷ける。雨脚が弱まるのを待っているのだろう。

暇だった、という理由もある。このまましばらく立ちつくしているままならば、ロッカーにある置き傘でも貸してやろうかと――そう思っていた。

それから十数分。

彼女は相変わらず雨を睨んだまま、そこに立っている。

見ず知らずの女子に話しかけるのはインドア派の人間としてはかなり勇気ある行動だが――このまま放置するのは心苦しい。立ち上がり、美術準備室から出る前にもう一度窓の向こうに目を向けた。

目を見開いた。

彼女は鞄から赤い折り畳み傘を取り出して、すたすたとよどみなく歩いて行く。

「――なんだったんだ？」

何事もなかったように、赤い傘はどんどん小さくなり、いつしか見えなくなっていた。

彼女のあの数十分間はどんな意味があったんだろう？

秋というのは梅雨に並んで雨の多い季節だ。

じめじめと湿気が多い日は絵の具の匂いがこもる。そういう美術室特有の匂いは嫌いじゃないが、制服に染み付いて困る。

不思議な女子生徒を目撃して数日も経たないうちにまた雨の日がやってきた。その日もいつものように部活動に勤しんでいた。好きなものを好きなように描くだけだが。

窓の外で静かに降る雨に気がついて、自然と目は昇降口へと向いた。

「――――あ」

いた。

その立ち姿を忘れるはずもない。

あの時と同じように、雨の何が憎いのかというくらいに睨みつけて、彼女は立っていた。普通にしていれば可愛いであろう顔は随分と台無しだ。

絵描きの性だろうか。

気がつけばスケッチブックを片手に、雨の中背筋を伸ばして立っている彼女の横顔を夢中で描いていた。

その次の雨の日も、そのまた次も、彼女は傘をさし急いで帰る生

徒の背中を見送るようにして立っていた。
スケッチブックの中には彼女の横顔がどんどん増えていく。これじゃあストーカーだろ、という冷ややかな突っ込みを自分で淹れながら、結局のところ彼女から目が離せなくなっていた。
あの最初の雨の日から、たぶんもう彼女という存在に捕まっていたのだ。
生徒の下校ラッシュからだいたい二、三十分。そのくらい経つと、彼女は一度ため息を吐いて傘を取り出す。
現実の彼女はいつも不機嫌顔。スケッチブックの中の彼女も同様に、眉間に皺を寄せている。
「笑えばいいのになぁ」
苦笑しながら彼女の赤い傘がなくなるまで見つめる。
赤い傘が点になり、見えなくなる。スッケチブックを持ち上げて、鉛筆をとり、一枚の絵を描き始めた。

＊　＊　＊

はじまりは、梅雨入り前のある日のことだった。
朝は晴れ渡っていた空が授業が終わる頃には崩れていた。
困り果てたように昇降口に立ち尽くすしかなかった。高校に入学してまだ数か月。親しい友達も増えたけれど、ほとんどが部活に入っている。帰宅組にはまだネットワークがない。
急に降りだしたのだから、突然止んだりしないかなとしばらく空を見上げたまま待ってみた。たくさんいた生徒の姿はまばらになり、今ではもう誰もいない。体育館の方からは運動部の声が聞こえ、校舎からは吹奏楽部の演奏が聞こえる。

「あー……やっぱ今日はハズレかなぁ」

ぼんやりとしていた私の耳にそんな声が届いた。
静寂を破った声の主の方を見れば、確か同じ学年の――名前は知らない男子生徒ががっかりしたように空を見上げていた。
いつから居たんだろう、と思わず私は彼をまじまじと見た。その視線に気づいたのか――彼もこちらを見る。
「お宅も傘を忘れたクチ？」
人懐っこそうな笑顔だった。少し明るい茶髪は雨で湿っているのに軽やかだ。
「う、うん。朝降ってなかったから」
「降水確率けっこう高かったよ？　天気予報はチェックしとかないとね」
くすくすと彼は笑う。天気予報をちゃんと見ていて、どうして彼は傘を持っていないんだろう？
「傘、盗まれたの？」
もしかして、と思って問いかける。最近の学校は傘くらい盗まれて当たり前になりつつあるから、可能性としては高かった。
「いや。持ってこなかっただけ」
「え？　でも」
降るだろうと分かっていて、どうして傘を持って来ないの？
浮かんだ疑問がそのまま顔に出ていたのだろう、彼は私の顔をみて笑う。
「俺の場合は、なんていうか……一種の賭けかな」
「賭け？　雨が降るか降らないか？」
「んー……当たらずとも遠からず？」
言葉を濁したので、気になったがこれ以上の追及はしなかった。
それからしばらく他愛ない世間話が続いた。

「これはもう強行突破しかないと思うよ？」
ため息を零しながら彼は空を指さす。雨は弱まるどころかどんどん強くなっていた。
「……そうみたいだね」
帰り着く頃には全身びしょ濡れだろう。想像してしまうと一歩踏み出す勇気が失せる。
「女は度胸って言うでしょ」
ぐい、と手を引かれて屋根の外に出る。
一瞬にして濡れ鼠になり、呆然とする。
「走った方がいいよ。鞄の中が悲惨なことになるから」
手慣れたように彼は小走りで校門まで走る。その声に現実へと引き戻され、慌てて私も駆け出した。
校門を出た後で、振り返る。逆方向に走って行った彼の背中は、もう見えなくなっていた。

次の日に廊下を歩いていると、ぽん、と突然肩を叩かれた。
振り返った先には昨日の彼がいた。
「風邪、ひかなかった？」
そう問う彼も元気そうだ。私は驚いて一瞬声を失ったが、首を傾げる彼に慌てて頷いた。
「へ、平気平気。私頑丈だから」
「そ？　ならいいんだけど。巻き込んだ張本人だし」
巻き込まれたとは思ってないけど。そんな言葉は易々とは出てこなかった。喉に張り付いたまま結局飲み込まれる。
話しかけてきた時と同じように、彼はあっさりと去っていく。
そんなことがきっかけなんて、単純なのかもしれない。

小さな賭けだ。
彼があの日そう言っていたように。
雨の日にもう一度、彼とあの場所で会ったなら。
今のところ、賭けには負け続けている。

＊　＊　＊

秋も暮れ、冬の気配が濃くなると、昇降口の彼女の姿は見えなくなった。理由はもちろん、雨があまり降らなくなったからだ。
クリスマスも冬休みも通り過ぎ――彼女の姿は窓の向こうにない。乾燥した冬に雨は無縁のもののようだ。雪の気配すらない。
まさか彼女は雪が降る中でも同じように昇降口に立つのだろうか。いくらなんでも風邪を引くだろう、と要らぬ心配をしてしまう。
スケッチブックを開こうとして、躊躇う。
数ヶ月前の自分を振り返って恥ずかしさで死ねそうだ。何を考えていたんだと膝詰で説教したくなる。

「おい、奥にいるか？」
顧問の声が聞こえて飛び跳ねた。やましいことは何もないのに、慌ててスケッチブックを机に置いて美術室へと出る。
「なんすか？」

部活動を放置し気味の顧問が放課後の美術室にいること自体珍しい。
しかし中年の顧問の隣にいる人を見て、逃げだしそうになる身体を理性で制御する。
「準備室にある道具をだな、借りたいらしくて」
彼女が、と紹介されたのは、雨の日に昇降口に立つ彼女だ。こんなに間近で見るのは初めてだと動揺する。
え、あ、はい、と口籠りながら彼女を準備室へと案内する。
「散らかってるから、気をつけて」
「けっこう狭いんですね」
使われてないイーゼルやら、デッサンの時に使う石膏像なんかもあちこちに置いてある。広さとしては五、六畳あるが、それらの備品や棚で行動できるスペースはかなり狭い。
「えーと、これだっけ？」
障害物を避けるように手を伸ばす。ぎりぎり届くか届かないかの微妙な位置にあった。
「大丈夫ですか？」
彼女が心配そうに問いかけてくる。インドア派はこういう時も男らしくなれない。
大丈夫、と答えながらやっとのことで目的の物を取り出す。振り返った先にいた彼女は机に手をついて――机の上にあるスケッチブックの上に、手をついていた。
何気ないことのはずだ。何も知らない人間からすれば。しかしその中身を知る唯一の人間としては動揺せずにはいられない。
「うぅわっ！　ちょ！　それ！」
慌ててスケッチブックを奪取しようと手を伸ばす。彼女はきょとんとして「これですか？」とスケッチブックを持ち上げた。心臓に悪過ぎる。
震えた手でそれを受取ろうとして――手が滑る。
落ちたスケッチブックは、落ちた拍子にぱらぱらとページをめく

り、彼女の横顔が何枚も何枚も現れる。
「あー……」
絶望したように項垂れる。驚いた彼女はスケッチブックを広い上げて自分の横顔を見ていた。頼むから止めてくれと叫びたいが、それが出来ないのはやはりストーカー紛いのこの産物のせいだろう。
「これ、なんでっ！」
言い訳も出来ない惨状に両手を上げて降伏する。
「いや、ホント言い訳するんじゃないけどさ」
美術準備室にある唯一の窓を指差す。彼女は不審げに窓に近寄る。
「ここからさ、見えるんだよね。雨の日にいつも君があそこに立ってるの」
美術室の裏側にある準備室の小さな窓から昇降口の様子が見下ろせる。たぶん三階だったら高さがあって、彼女の姿は見えなかっただろう。
「でも、だからって……」
「あーやーだからごめんなさい。勝手に描いていたのは謝ります。絵描きの性分なんです」
ほぼ開き直ってしまった俺とは引き換えに、彼女は頬を赤く染めて俯いていた。間近で見る彼女はやはり可愛い――雨の日のような表情でないだけに。
「純粋に、興味がわいたんだ。傘を持ってるのに、ずっとあそこに立ってるのが」
興味を持ったら描きたくなる。それはもう癖としか言いようがなかった。承諾を得なかったのは彼女の名前も学年も知らなかったからという正当な理由と、勇気がなかったという情けない理由が入り乱れている。
彼女にはあそこに立つ自分の幻影が見えているのだろうか、雨の日と同じような表情で一点を睨みつけている。
久し振りに見たその横顔は、なんだかいつもよりも痛々しく、どこか切ない。

気がつけば、好奇心が理性を打ち負かしていた。

「――――君は、何を待ってたの？」

＊　＊　＊

痛い質問だった。

賭けに勝つことはないと分かってしまった私には、それはナイフのように鋭く、深く胸に突き刺さる。

もし、もう一度、彼とあの場所で同じように出会うことがあったなら――そのときは思い切って告白しようと。

私にとっては愛しいあのきっかけで。

梅雨の間には機会に恵まれなかった。秋の雨の日々はすれ違うことも多く、少し諦めかけていた。

その日の雨は朝から降り続いたもので、さすがの彼も傘なしとは思えなかった。だからいつも急いで向かう昇降口も、ゆっくりと晴れた日と同じように向かった。

帰宅生徒は若干少なくなっていたが、まだまばらにいる。そんな中で彼の姿を見つけたのはやはり恋の愚かさ故だろう。

「あのっ！」

チャンスだと思った。今しかないと。

そう思って彼の背中に声をかけた、その時だ。

「クロちゃん！」

私の後ろから、一人の女子生徒が駆けてくる。声に気づいた彼が

振り向いて、今まで見たことのないような優しい笑顔になった。
「ちー」
幼いあだ名で呼び合う彼らが、幼馴染か何かであることは容易に想像できた。それ以上の関係であることは、お互いの目を見れば一目瞭然だ。
「もう。いいかげんにその傘持ち歩かない癖直そうよ。傘一つじゃ狭いでしょ？」
そう言いながら彼女は水色の傘を彼に渡す。当然のことのように彼が傘を開いて、二人肩を寄せ合って一つの傘の下を歩く。
「別にいいじゃん。どうせ今は朝も一緒に行ってるんだし」
そう言う彼の左肩は少しだけ傘からはみ出ている。このまま帰れば左の肩は濡れてしまうんだろう。一方、彼女は平気そうだ。彼が少しも濡らさないように気をつかっているのだと分かる。

――ああ、そうか。

彼は、彼女を待っていたんだ。
彼は、彼女が来ることを賭けていたんだ。

その日は傘をささずに歩いて帰った。
頬を伝う涙が雨に紛れて見えないように。

スケッチブックの中の私はひどい顔をしていた。むっつりとした顔で、まるで何かを睨んでいるみたいだった。あんな顔をしていた

のかと恥ずかしくなるくらい。
何枚も何枚も、どこか少し違う角度で、違う表情で、描かれた私はまるで終わらせることも出来なかった恋を責められているみたいだ。
そしてなにより――一番最後のページに描かれた私の姿が、何よりも痛かった。

「――他人の男がこんなの持ってるのって、気持ち悪いだろうからさ。あげるよ。好きに処分して」
照れたように、困ったように笑って描いた本人はスケッチブックを差し出してきた。受け取るかどうか迷っていると、半ば無理やり押しつけるようにスケッチブックを渡してきた。
「ごめん、俺としては大事な作品でもあるから、俺は捨てれないんだ」
だから、君が捨てて。
そう言われると拒むことも出来ず、そのままそのスケッチブックは持ち帰られた。捨てるのも申し訳ないような気がして――開かないまま棚にある。
スケッチブックはまだ三分の一くらい使っていない。最初の方は風景画が多かった。半分くらいから、私の不機嫌そうな顔が増える。そのほとんどが鉛筆画だ。たぶん私があそこに立っている間に描いたものなんだろう。
一番新しいページ。
淡いパステルで塗られたその絵が、脳裏に焼き付いて離れない。
雨上がりの空の下。赤い傘をさした私が。
嬉しそうに、幸せそうに、笑っていた。

一月の大半は雨も雪も降らず、空気は随分と乾燥していた。
風邪も流行るこの状況で、それはある意味で恵みの雪なのだろうか――しかし学生にしてみれば最悪な天気だ。
朝の天気予報では「雪がちらつくこともあるでしょう」レベルだった。しかし授業が終わった頃にはぼたぼたと湿った雪が降っている。これはフードで凌げるレベルではなかった。
文句を言いながら帰る生徒の背中を見ながら、雨の日に立っていたあの場所に同じように佇む。
「あれ？　帰らないの？」
皮肉にも声をかけてきたのは、数か月の間恋をした相手だ。茶色の髪に少しだけ雪が積もっている。
「そっちは？」
「あ、ちょっと待ち合わせっていうか」
そう待たずにあの女子生徒は走ってくるだろう。水色の傘を片手に。
昇降口から二階の美術準備室の窓を見上げても、人影は見えない。ここで目が合えばどういう反応をするんだろうかと、それも少しだけ楽しみだったんだけど。
「風邪ひくよ？」
さすがに雪の日に外で立ちっぱなしというのは無謀だろうか、心配そうにそう言ってくる彼に、まだ少し胸が痛くなる。
「――賭けてるの」
そう言うと、彼は一瞬目を丸くして、そして笑う。
クロちゃん、と彼を呼ぶ声が聞こえ、彼の待ち人はやって来た。
「健闘を祈るよ」
そう言って手を振る彼に手を振り返す。二人の後ろ姿を見送れるくらいには、失恋の痛手は回復した。
はぁ、と吐く息は白い。
空からは絶え間なく雪が降り注いでいた。

＊　＊　＊

朝の天気予報を信じた自分がいけなかったのか――水っぽい雪を恨めしげに睨みながら昇降口へと向かう。

彼女にスケッチブックを渡して以来、なんとなくスランプに陥って部活からも足が遠のいている。ましてこんな天気が悪い日に遅くまで学校に残ることはないだろう。

「あー……どうするかなぁ。フードじゃ無理だよなぁ」

少しくらいの雪なら傘はささない派の人間だが、さすがに今回の雪は傘がないとびしょ濡れだろう。

「走って帰るか……」

運動はそんなに得意じゃないんですけどね、とため息を吐きながら靴を履き替える。吐いた息は白くなって、わずかな余韻の後に空気に溶けていく。

――彼女はもう、あそこに立っていないだろうか。

そんな未練の残る疑問が浮かんだ時だった。

自然と目は彼女の立っていたあたりを見た。

「今度は、勝てたなぁ」

くすくすと笑う声。

「――――――え？」

自分の目を疑った。

黒くて長い髪は、雪で少し濡れていた。頬や指先は寒さのせいで赤くなっている。

「狭くてもいいなら、入りますか？」

そう言って彼女が取り出したのは赤い折り畳み傘。
彼女はもう、降る雪を睨まない。
問いかけてくる彼女は、いつか描いた絵の中の彼女より数倍綺麗に笑っていた。

新しい恋のはじまりは、雪の降る日になりそうだ。

（後書き）

読了ありがとうございました。

大学の部活の部誌に出した話だったんですが、せっかくなのでこちらでもお披露目を、と思いまして。

さりげなく「レイニー・レイニー」と関連してます。読んでなくても全然問題ない感じですが。

ご意見、ご感想などありましたらお願いします。

ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0473g/

雨、ときどき雪

2010年10月28日06時02分発行